# 第102回　岡　山　外　科　会

**日時**：昭和62年２月21日（土）13時より

**会場**：岡山大学医学部臨床第２講義室

**会長**：折　田　薫　三

（昭和　年　月　日受稿）

## １．肺癌による小腸転移の２例

岡山労災病院　武部　晃司

肺癌の小腸転移と思われる62才男性，74才男性の２手術例を経験した．症例１は穿孔による腹膜炎症状を呈し，症例２は腫瘍による腸閉塞症状を呈した．共に小腸部分切除，端々吻合術を施行した．腹部症状は軽快したが，術後13週，20週にそれぞれ肺癌により死亡した．

本邦での肺癌小腸転移切除例は，本症例を含め29例を数えるにすぎない．その29例について若干の文献的考察を加え，報告する．

## ２．肺アミロイドーシスの１例

水島中央病院外科　竹内　龍三　稲岡　祥治　森本　接夫

症例は70歳女性．検診での胸部Ｘ線写真にて，左 $S^6$ に径２㎝の腫瘤を指摘され肺癌の疑いで手術を施行した．しかしこの腫瘤はエオジン淡染・コンゴレッド陽性のアミロイド沈着であった．臨床所見などから原発性限局性肺アミロイドーシスと考えられ，肺門リンパ節にはサルコイドーシスを合併していた．肺アミロイドーシスは非常に稀な疾患であり，サルコイドーシスを合併した例は文献上未だ報告をみない珍しい症例であると思われる．

## ３．肺硬化性血管腫の１例

光生病院　村上　正和　佐能　亮之　横山　伸二
槌田　典平　難波　一弘　沼田　尹典
岡山大学第二外科　清水　信義

いわゆる肺硬化性血管腫は比較的まれな肺の良性疾患である．本腫瘍の報告は増加しているが腫瘍の増殖の主体となる細胞の由来に関して一定の見解を得られていない．最近，我々は12年間の長期にわたり観察された後，切除した肺硬化性血管腫を経験したので報告する．症例は61歳女性，腫瘍は左葉 $S_3$ と $S_4$ の間にあり，重さ60ｇ大きさ７×６×4.5㎝であった．

## 4．中葉 sleeve lobectomy を行った早期肺癌の1例

岡山大学第二外科　河田 真作　吉富 一郎　中田 昌男
伊達 洋至　小橋 雄一　三宅 敬二郎
森山 重治　宮井 芳明　中野 秀治
安藤 陽夫　栗田 啓　清水 信義
寺本 滋

症例は，73才男性で，主訴は喀痰細胞診陽性。昭和61年9月に集団検診の喀痰細胞診で class Ⅴの陽性所見を指摘され，同11月気管支鏡で，中下葉気管支分岐部に発赤と不整を認め，生検で扁平上皮癌と診断された．呼吸機能検査より，中下葉切除による術後肺機能の低下が大きい為，右中葉の sleeve lobectomy を施行した．気管支吻合は 4-0 Dexon で単純全層縫合を行なった．

## 5．Morgagni 孔ヘルニアと食道裂孔ヘルニアを合併した1例

川崎医科大学胸部心臓血管外科　原 太久茂　藤原 巍　土光 荘六
正木 久男　山根 尚慶　金沢 成雄
佐藤 正隆　勝村 達喜

症例は，69歳，女性で前縦隔悪性腫瘍と食道裂孔ヘルニアの診断にて，手術を施行した．前縦隔腫瘍は，大網をヘルニア内容とする Morgagni 孔ヘルニアであった．我々の知り得た限りでは，Morgagni 孔ヘルニアと食道裂孔ヘルニア合併例の本邦報告は，3例のみであった．

## 6．腓骨頭部原発の腫瘍性病変

岡山大学整形外科　川井 章　伊藤 士郎　新田 浩喜
栗原 康雄　住居 広士　定金 卓爾
田辺 剛造

昭和29年から昭和61年までの32年間に，当科で治療を行った腓骨頭部原発腫瘍性病変について検討した．症例は10例で，男5例，女5例，年齢は9才から47才であった．内訳は骨肉腫4例，骨巨細胞腫2例，孤立性骨嚢腫2例，動脈瘤様骨嚢腫及び骨化性線維腫が，各1例であった．各々のX線上の特徴，及び治療について検討を加えた．切除術を行った骨肉腫3例は，全て局所再発をきたした．腓骨頭部の解剖学的特徴による問題点として，腓骨神経麻痺が2例に，膝不安定性が1例にみられたが，共に保存的に軽快した．孤立性骨嚢腫に対して掻爬，骨移植を行った症例では術後の再発を認めている．腓骨頭部に発生する腫瘍性病変は，大腿骨，脛骨に比べると少ないが，その解剖学的特徴より，骨肉腫などでも患肢温存の良い適応となると考えられ，今後治療上の問題点となると思われる．

## 7．嚥下障害を主訴とした頚椎前縦靱帯骨化の1例

岡山大学整形外科　板阪 利生　中原 進之介　石田 裕
本城 康臣　伊藤 康夫　田辺 剛造

頚椎前縦靱帯骨化は，頚椎の運動制限以外に臨床症状を呈することは稀であるが，今回嚥下障害と嗄声を呈した頚椎前縦靱帯骨化を経験したので報告する。嚥下障害及び嗄声は，頚椎前縦靱帯骨化に伴う骨棘による圧迫症状であり，直接的圧迫に加えて，反回神経への刺激が原因であると考えた．

## 8．高度の脚長差を補正した股関節全置換術の2例

岡山赤十字病院整形外科　秋山明三　三宅完二　人見康満
小野勝之　高橋裕彦　井上貴雄

股関節全置換術において，脚長差を補正する場合，大腿骨の引き下げは，3㎝程度までは神経麻痺等の合併症はほとんどなく，それ以上の引き下げには問題点が多いといわれている．しかし，Harold らのようにそれ以上の補正も可能であるとする意見もある．今回我々は，5㎝以上の高度の脚長差を補正し，術後経過も良好な症例を経験したので，若干の文献的考察を加えて報告した．

## 9．両側アキレス腱に発生した黄色腫の1例

岡山済生会病院　井川晴友　他

黄色腫は，一般に高脂血症に伴うとされているが，われわれは，これを伴わずリポ蛋白を構成するアポ蛋白の軽度上昇を認める両側性アキレス腱黄色腫を経験した．手術は，黄色腫摘出術とアキレス腱再建術（V-Yadvancement と Lindholm 法）を施行し，術後6カ月にして疼痛もなく，歩行も正常である．現在，特殊検査と同胞の血液検査などにて検討をすすめている．

## 10．内シャント造設後に併発した上腕静脈瘤の1例

岡山大学第二外科　久保義郎　吉富一郎　草井孝志
松前大　清水康廣　内田發三
寺本滋

症例は45歳，女性で，シャント造設後4年目に左上肢静脈瘤を併発した．静脈高血圧症の頻度は0.8～3.2％と言われ，治療は軽い浮腫程度で疼痛や発赤を伴わない場合には経過観察でよいが，本症のように静脈瘤を併発したり，典型的な症状を有する症例や Sore thumb syndrome と呼ばれる状態に陥った症例では，外科的手術の適応と考えられる．

## 11．膝窩動脈瘤による膝窩動脈閉塞症の1治験例

倉敷松田病院　村嶋信尚　松田忠和　柚木正行
小林達則　船曳定実　大崎俊英
岩藤隆昭　松田和雄

比較的若年の膝窩動脈瘤を2年間経過観察したが，膝窩動脈閉塞をきたした為膝窩動脈瘤の切除および血行再建を自家静脈移植にて行なった．膝窩動脈瘤は，同部の閉塞をきたす危険性が高い為，診断がつき次第血行再建を施行することが肝要である．

## 12. 開心術における冷凍血液の使用経験

心臓病センター榊原病院心臓血管外科　難波宏文　谷口　尭　仲原純一
新岡俊治　高田茂美　枝広　徹
榊原　宏　榊原　亨

開心術では，通常多くの血液を必要とする．しかしながらこの多量の血液使用による術後合併症の発生頻度は予想以上に高く，社会生活への復帰を妨げている．当科では1982年より冷凍自家血使用による開心術を，1983年より冷凍他家血使用による開心術を適応可能な症例に対して行ってきた．冷凍血液のみで開心術を行えた症例では輸血後肝炎の発生を見ていない．従来の同種血使用による開心術症例と比較し報告する．

## 13. 脾内転移をきたした腹膜偽粘液腫の１例

倉敷中央病院外科　田野龍介　高三秀成

症例は71才，女性で，脾嚢胞にて紹介来院した．ＣＥＡが239.3と高値を示し，腹部ＣＴでは脾嚢胞と限局性腹水を認めた．術中所見では腹腔内に多量の腹膜偽粘液腫を認め，卵巣は摘出済みで，虫垂は慢性虫垂炎程度の所見であった．摘脾術，胆嚢摘出術（胆石症に対して）と共に念の為虫垂切除術施行し，腹膜偽粘液腫はできるだけ除去した．病理組織診断では虫垂原発のムチン産生性腺癌で，脾転移と考えられた．

一般に腹膜偽粘液腫の遠隔転移は稀とされているが，本症例の場合，具体的な経路は不明だが虫垂癌が脾臓へ遠隔転移をきたしたものと推測された．

## 14. 消化管異物症例の検討

川崎医大附属川崎病院外科　吉田一典　月山雅之　山下昭彦
山田育宏　朝倉孝弘　田原昌人
木曽光則　光野正人　松井俊行
小山昱甫　川崎祐徳　吉岡一由

過去10年間にＸ線，内視鏡的または開腹によって確認された61例について検討を加えた．性差は３対２で男性に多く，年齢では５才以下が過半数を占めた．種類は硬貨症例19例と多く，全例10才以下であった．処置では，食道は摘出又は胃内挿入すべきで，胃内異物は，停滞すると化学的変化をきたすもの，胃内に長期間停滞するもの，穿孔の危険性のあるもの以外は，厳重な経過観察のもとに，自然排泄を期待することが望ましい．

## 15. 興味ある経過をとった閉鎖孔ヘルニアの１手術例

川崎医科大学消化器外科　石永裕司　長野秀樹　今井博之
笠井　裕　岩本末治　山本康久
佐野開三

今回，我々は比較的稀な疾患とされる閉鎖孔ヘルニアを経験したので報告する．

症例は76歳，女性，主訴は嘔吐，左下肢の脱力感．数年間にわたり左鼠径部から左大腿内側にかけての疼痛（Howship-Romberg 徴候），一過性の腸閉塞症状を繰り返していた．

術前に小腸造影で閉鎖孔ヘルニアと診断し手術を施行した．トライツ靱帯より1.3mの空腸がRichter型の閉鎖孔ヘルニアを起こしていたが，腸管壊死はなかった．

## 16. メッケル憩室による内ヘルニア嵌頓の1治験例

津山中央病院外科　藤岡正浩　野中泰幸　大山正史
林　同輔　黒瀬通弘　徳田直彦

メッケル憩室が盲腸周囲ヘルニア嵌頓を，おこした症例を経験したので報告する．

症例は4才の男児で手術歴はない．腹痛嘔吐を主訴とし急性腹症にて入院した．イレウスの診断にて緊急手術施行し，下回盲窩に嵌頓，絞扼されたメッケル憩室を回腸と共に切除し，ヘルニア門を閉鎖した．術後経過は良好であった．盲腸周囲ヘルニアとしては，本邦15例目，メッケル憩室が嵌頓した症例では本邦初であった．

## 17. 肝動脈瘤の1例

川崎医科大学胸部心臓血管外科　辻　健二郎　藤原　巍　稲田　洋
野上厚志　山本　尚　近藤潤次
勝村達喜

13年前胃切除術の既往があり，今回右季肋部痛と拍動性腹部腫瘤を認め，ＣＴ及び動脈造影にて固有肝動脈瘤と診断し，瘤切除及び血行再建術を施行した症例を経験したので，文献的考察を加えて報告する．

## 18. 大腸癌転移性肝癌切除例の臨床病理学的検討 転移巣の被膜形成と原発巣について

岡山大学第1外科　津下　宏　三村　久　浜崎啓介
高倉範尚　岡林孝弘　折田薫三

大腸癌転移性肝癌切除症例19例の原発巣と肝転移巣の組織学的検討と画像診断および予後調査を行なったところ，肝転移巣に被膜を形成するものは原発巣の組織分化度が高分化でＩＮＦ$\beta$のものが多く，血管造影所見では腫瘍濃染像が辺縁濃染・中心非濃染を示した．予後は被膜を形成したものの方が3年以上の長期生存を得る傾向があった．

## 19. ＡＴⅢ欠乏症による急性門脈閉塞の1治験例

倉敷松田病院　柚木正行　松田忠和　村嶋信尚
小林達則　船曳定実　大崎俊英
岩藤隆昭　松田和雄

症例は46才男性．主訴は上腹部痛．ＡＴⅢ活性は58%．門脈閉塞とTreiz靱帯より10cm～45cmの空腸の壊死があり，門脈内血栓除去と空腸部分切除，端々吻合を施行．術後1カ月目の上腸間膜動脈造影静脈相において門脈再閉塞とcarernous transformationを認めた．

## 20. 高齢者頚椎損傷の治療経験

岡山労災病院整形外科　須田 達也　島田 公雄　佐藤 徹
衣笠 清人　田辺 滋樹　村川 浩正

高齢者の頚椎損傷では，患者の bed-fast を極力短縮したい．だがその為には，強力な固定法が必要である．そこで，強固な固定を得る為には侵襲の大きな方法が必要であり，高齢者には耐え難いというジレンマが有る．本日は手術的治療を施行せる2例と保存的治療の1例を呈示し，高齢者の頚椎損傷の問題点につき感じた事を述べる．

## 21. 特発性脊髄硬膜外血腫の一例

岡山労災病院整形外科　衣笠 清人　島田 公雄　佐藤 徹
須田 達也　田辺 滋樹　村川 浩正

脊髄外傷は別として，急激な四肢の麻痺をきたした患者を診察する場合，その診断に苦慮することが多々ある．その原因の1つに，いわゆる Spinal apoplexy と言われる脊髄硬膜外血腫がある．本疾患は1869年の Jackson 以来，散一的にその報告を見るが，比較的稀な疾患である．今回，我々も特に誘因なく両下肢麻痺をきたした脊髄硬膜外血腫の1例を経験したので，若干の考察を加え報告する．

## 22. 狭頭症の手術経験

岡山大学脳神経外科　松本 健五　本田 千穂　桜井 勝
中村 成夫　西本 詮

我々は，一側冠状縫合の早期癒合による斜頭蓋の2例を経験したので，その診断及び治療法について報告した．症例は，1才及び2才の女児で，頭蓋及び顔面の変形を主訴として当科受診した．頭部単純写とＣＴスキャンにて冠状縫合の閉鎖以外に眼窩の非対称，患側の下顎骨・錘体骨の形成不全を認めた．この症例に対し，lateral canthal advancement 法による頭蓋顔面形成術を行い，美容上の改善を得た．

## 23. Brown-Roberts-Wells 型 stereotaxic system 使用による不随意運動症治療の小経験

岡山労災病院脳神経外科　難波 真平　諸岡 弘　篠山 英道

Brown-Roberts-Wells 定位脳手術装置を用いて3例の不随意運動症の手術を行ったが，dystonia の1例を具体例として本装置の概略について述べた．本装置の特徴は，まずレントゲンフイルム上での拡大率の計測を正確に行い，頭蓋からの手術針刺入点の3方向の座標の決定，ダミーの使用により手術針の刺入方向及び深さを microcomputor により正確に決定できることにあるが，頭蓋の固定針について改良点のあることについても述べた．

## 24. バセドウ病の術前準備（抗甲状腺剤による副作用例を中心に）

国立岡山病院外科　岡田 富朗　佐々木 澄治

最近5年間に当科で手術したバセドウ病患者は50例であったが，このうち4例は，抗甲状腺剤による副作用のため，術前準備において抗甲状腺剤を使用できなかった．これらの症例に対し，我々はルゴール及びβブロッカーを用い機能の抑制を図ったが，ステロイドホルモンの併用も有効であると考えられた．その使用にあたっては，手術を前提に，短期間用いるように心掛けるべきであろう．

## 25. 頚部悪性リンパ腫の2例

岡山赤十字病院外科　梅森君樹　佐藤泰雄　大塚康吉
小野監作　川上俊爾　古谷四郎
辻　尚志　曽我部長徳
同病理　国友忠義
岡大医学部付属病院病理　田口孝爾
同第二病理　元井　信

症例1：17才男性　左顎下部リンパ節腫脹を主訴として，1年4ヶ月の間に3回生検を行ない組織像がReactive lymph node hyperplasiaであったが，4回目に摘出術施行し，3×2.5cm大のリンパ節2つの組織標本でホジキンリンパ腫と診断された．症例2：9才男性　急速に増大した右顎下部腫瘤を主訴として来院，3.5×6.5cm大の腫瘤摘出し，組織診断はノンホジキンリンパ腫であった．以上最近経験した悪性リンパ腫の2例を報告した．

## 26. 甲状腺原発悪性リンパ腫の1手術例

岡山済生会病院外科　赤松良彦　片岡和男　広瀬周平
筒井信正　木村秀幸　藤原俊義
平本孔彦　間野清志

甲状腺原発悪性リンパ腫は，適切な診断と治療により他の悪性リンパ腫に比較し予後が良好である．今回その1手術例を経験したので，その特徴や他甲状腺疾患との鑑別，治療方針について若干の文献的考察を加えて報告した．

## 27. 続発性副甲状腺機能亢進症 ー術前部位診断についてー

岡山大学第一外科　田中信一郎　宮崎雅史　塩崎滋弘
阪上賢一　折田薫三

続発性副甲状腺機能亢進症の手術に際し，術前の部位診断が重要であり診断にはエコー，シンチ及びCTが用いられる．エコー，シンチ及びCTで4線すべてを確認された症例は57.1%，14.3%及び0.0%であり，重量0.5g以下の副甲状腺は87.5%，50.5%及び10.0%の割合で確認された．また正診率は82.5%，56.1%及び33.3%であった．以上より術前部位診断にはエコーが最も有効でありシンチ，CTの併用により正診率が向上すると考えられる．

## 28. 乳癌の補助診断法として サーモグラフィが有用であった2症例

岡山大学第二外科　川島 邦裕　臼杵 尚志　藤原 弘道
曽我 浩之　小松原 正吉　寺本 滋

乳腺サーモグラフィは腫瘍の機能的側面を検索する非侵襲性の検査法である．今回我々は他の画像診断法において良性の所見を呈したが，サーモグラフィにて悪性が強く疑われたために悪性と診断し得た乳癌の2症例を経験した．これらの症例の存在は，サーモグラフィがスクリーニング検査を含む乳癌の補助診断法として有用であることを示しており，今後他の画像診断法と併用することにより，乳腺疾患の診断率の向上が期待できる．

## 29. 特発性食道破裂の1例

倉敷中央病院外科　吉村 玄浩　高三 秀成

特発性食道破裂は，正常な食道壁全層が，外的要因や器質的要因なしに突然に破裂する疾患である．今回我々は出血性胃潰瘍による吐血により生じたと考えられる症例を経験したので報告した．近年吐血に対して緊急内視鏡による止血がおこなわれ，良好な成績が得られているが，本疾患を合併している場合，内視鏡操作により，破裂創を拡大してしまう可能性がある．咽吐を主訴として来院した患者に対しては，この疾患を考慮していなければならない．

## 30. 食道結核の1治療例

川崎医科大学消化器外科　武田 隆久　瀬尾 泰雄　清水 裕英
林 秀宣　牟礼 勉　保田 健太郎
木元 正利　佐野 開三

食道結核は肺外結核の中でも非常に稀な疾患で，本邦では，1914年三田らが初めて報告して以来27例の報告を見るにすぎない．

今回我々は，嚥下困難，軽度の嚥下痛を主訴とする52才男性で内視鏡及び生検による病理組織学的検査，結核菌培養にて胸部中部の原発性食道結核を診断し抗結核剤の3剤併用療法により著明な改善を見た稀なる一例を報告した．

## 31. 胃カルチノイドの1例

おおもと病院　岩本 伸二　浦上 育典　庄 達夫
石原 清宏　酒井 邦彦　岩藤 真治
山本 泰久

症例：71才　男性　自覚症状は認めず，健診で要精査といわれ，胃X線，内視鏡および生検にて胃体部大弯のカルチノイドと診断した．術前のUSにて両葉に肝腫瘤を認めた．手術は胃亜全摘術および肝腫瘤の一部を切除した．肝腫瘤は術前肝転移を疑ったが，組織にて肝細胞癌であったためTAEを行い術後4カ月の現在良好な経過を示している．

## 32. 小腸原発アミロイドーシスの1例

岡山済生会病院外科　髙石 義浩　北村 元男　大原 利憲

森谷 行利　赤在 義浩　文　喆男
間野 清志

アミロイドーシスは，全身性に沈着することが多く多彩な症状を呈す．今回我々は空腸に限局し，腫瘤形成性原発性アミロイドーシスと考えられる1症例を経験したので若干の文献的考察を加え報告した．

## 33. 胃噴門部癌の臨床病理学的検討

岡山大学第一外科　合地　明　上川 康明　淵本 定儀
三村　久　折田 薫三

過去10年間の胃噴門部癌につき手術々式と予後との関係を中心に臨床病理学的検討をおこなった．対象52例では高令男性に多く，組織型では高分化腺癌が多かった．また，再発形式は血行性の頻度が高かった．胃全摘，噴切による予後の差はなく，$S_0$，$S_1$ 症例はNo．4d，5,6 転移例はなく，噴切の適応と考えられた．